「夜、海へ行った時には、気をつけるんだよ。」
—「キジムナーと友達」話の背景とその現代的展開—

栗　原　　健

はじめに

沖縄で最も親しまれている妖怪と言えば、ガジュマルの木に棲むとされるキジムナーである。沖縄テレビ放送のマスコットキャラクターである「ゆ～たん」を始めとして、最近では可愛らしいキジムナーの絵や像を各地で見かけるようになって来ている。一般に想像されるキジムナーのイメージは、ガジュマルの木に棲む赤毛の子供であり、人間と親しくなることもあるとされている。このため児童文学などではしばしば、キジムナーは人間の子供たちとも友情を結ぶ心やさしい存在として描かれる[1]。

しかしながら、伝承の世界では、キジムナーは必ずしもいつも人間に親切であるわけではない。夜道を行く人を惑わせる、寝ているところに灸を据えたり、押さえ込んで金縛りにするといった悪戯者の面もあるほか、恩を忘れた人間に対して罰を下し、時には相手を殺してしまう残忍さも持ち合わせた存在である。本論では、キジムナーの生態や行動パターンに関する伝承を概説した後に、妖怪との友情とその破綻を語る「キジムナーと友達（魚取り、仕返し）」話を分析することにより、キジムナーの両義的性格について検討を加え、なぜこのような伝承が語り伝えられているのか、その理由について考えてみたい。後半では、現代日本におけるネット上の噂話や「実話怪談」に登場するキジムナー像を取り上げ、この妖怪の性格がこれらのメディアの中でどのようにとらえられているのかを考察する。

1　キジムナーの生態と行動

一口にキジムナーと言っても、そのイメージは一様ではない。渡嘉敷守はキジムナーの生態について、「姿は赤面、赤頭髪、小童で、古い大樹の穴に住む。行動・性質は①漁を好み、魚の左目を食い、蛸を嫌い、②松明を持って海や山の端を歩く（キジムナー火）、③寝ている人の胸を押さえる」と要約しているが、同様の特徴を備えた妖怪に関する伝承が沖縄全土に存在しており、地域によってさまざまな名称で呼ばれているのである[2]。沖縄本島の南部ではキジムナーの名称が一般的であるが、本島北部ではアカカナジャー、アカブサー、ヤンバサカー、ボージマヤー、シノーラー、セーマ、ハンダンミーなどと呼ばれることもあり、特にブナガヤー（国頭村・大宜味村ほか）の名称はよく知られている。中部ではヤチバー、ケンケンジムナー、カーガリモーとも言うが、本島以外では、久米島ではマア・キムナーやカーカブロー、伊是名島ではウンサガナシー、宮古島ではインガマヤラ

ウやマズムヌ、石垣島ではマンダー、小浜島ではマンジー・マンジャーといった名称も見られる[3]。また、奄美諸島のケンムンにもキジムナーとよく似た特徴が認められる[4]。

これらの妖怪の生態や行動パターンには、地域によってバリエーションが見られ、「相撲を挑戦し人を襲う」（堀川）、「人を惑わし、土を食べさせる」（津嘉山）、「山の中にいて奥山の途中まで人を誘い消える」（謝名）、「火の玉になって人間に近づいて来る」（久米島具志川）といった悪戯者らしい面も伝えられている[5]。伊平屋島のアカカナジャーについても、人を惑わして遠くの場所へ連れ出したり、神隠しに遭わせるとの話がある[6]。一方、ブナガヤーについては人間の山仕事を手伝うことがしばしばあり、「山の神的性格が色濃く語られている」（辻雄二）と指摘されている[7]。久高島のヒジムナーは、髪が赤く木を住処とし、「漁りが得意で、両手の親指に火をともす」という点ではキジムナーと共通しているが、下半身が無いとされている。これを見て幽霊と呼んだ漁師の男性が、顔をヒジムナーの指の火で焼かれたという話も伝えられている[8]。

こうした妖怪たちは、果たして同一の存在と見てよいのであろうか。この点については、「おそらく、かつては島ごとに独自の妖怪伝承が存在していたのであろうが、伝播力の強い首里王府の文化と共に沖縄本島のキジムナー伝承が各島にもたらされて今日のような伝承状況となったものと推定される」との原田信之の考察が妥当であると考えられる[9]。その地域の支配的文化が九州のものであるか、奄美のものであるか、沖縄本島のものであるかによって、同じ南島でも妖怪伝承の内容に相違が見られるからである[10]。例えば、伊是名島に棲むという妖怪ウンサガナシーについては、キジムナーのものとよく似た伝承が伝えられているにもかかわらず、キジムナーとは「別のはず」と語る話者もいる。本部半島の八重岳に出没したというシェーマについても、「キジムナーはダマシヤー（人を騙す奴）だが、シェーマはそんなことはしない」との話者の言葉が記録されており、キジムナーとは別個の妖怪として独自の伝承が存在していたことがうかがえる[11]。

このため原田は、名称が異なるこれらの妖怪を呼ぶために「キジムナー類」との呼称を用いており、伊藤龍平もこの総称の使用を勧めている[12]。本島のキジムナー話が普及するにしたがって、それまで別個の名称で呼ばれていた類似妖怪が全て「キジムナー」と呼ばれてしまう傾向が見られており、従来の伝承が失われて行く危険がある。この点を考えると、「キジムナー類」との呼称は確かに有益である。

2 「キジムナーと友達（魚取り、仕返し）」話の内容

島袋源七の『山原の土俗』（昭和４年）には、キジムナーは漁に長けているものの、「魚は捕つただけ、左又は左右の目だけ抜き取つて食ふものであるから、これと親交を結べばいつでも魚が食へ、又金持ちになれるなどといはれてゐる」との記述が見られるが、これがキジムナーをめぐる物語の中で最もよく知られているモチーフである[13]。キジムナーと親しくなった者が、キジムナーが獲ってくれる魚によって富を得るという話は、沖縄では

頻繁に語られている。しかし、この種の話の後半では往々にして、キジムナーが嫌うことを人間が行った（放屁をする、他の人に話をする等）ため、あるいは人間がキジムナーと縁を切ろうとした（住処の木を焼く、蛸を投げる等）ために友情が崩れることとなり、せっかく得た富を失う、場合によってはキジムナーに手痛く復讐されるという結果になる。

この話型の話は「キジムナーと友達（魚取り、仕返し）」と呼ばれているが、沖縄の民話集を開けば多くの場合、同様の構造をした物語をすぐに見つけることができる[14]。特に、佐喜眞興英の『南島説話』（大正 11 年）に収録されている次の物語は、キジムナーに関する研究においてしばしば引用される有名な話である。

宜野湾間切新城村中泊の屋敷に大きなビンギ（木の名）があつた。亭々たる老木であつたが、そこにギシムナ（多分木じもの、であらう、木の精のことである）が住んで居て、中泊の翁と友人になつた。それで毎晩彼を海につれて行つた。魚をとり左の目だけ自分で食べて、あとは翁に與えた。お陰で翁は裕かに健やかに生活して行くことが出来た。始めの中は嫌でもなかつたが、後には毎夜起こされるのがつらくなつて来た。翁は何とかしてキジムンと手を切らうと思ふて、一夜かの巨樹ビンキに火をつけた。さうするとキジムンは「熱田比嘉へ、熱田比嘉へ」と云つて去つた。然るに其の後裕かに暮していた中泊家はたちまちつぶれそれに引きかへ、熱田村の比嘉は金持になつた[15]。

宜野座村や名護には次のような話も語られている。

名幸タンメーという人はいつも海に出ていたので、キジムナーと友達になった。だけど、毎日海に連れていかれるので、あきたんだね。キジムナーは名幸タンメーに、

「屁をしたら、どんな深い海の底でも、屁をしたらおまえを落とすよ。だから屁をしてはいけないよ」と言った。が、名幸タンメーは、わざと屁をして、キジムナーと別れた。

その後、キジムナーは、

「おまえは俺と別れたから」

と言って、名幸タンメーの家を焼いたそうだ[16]。

キジムナーがよ、浜辺のアダンの木の中に家を造って、毎晩、いつもの時間になったら、友だちになった人を起こして、魚取りに行っていた。魚取りに行ったら、このキジムナーは、魚の目ん玉ばかり食べよったそうだ。そして、残りは友だちにくれていたと。

そんなふうにして、毎晩、キジムナーと魚を取っていたんだが、あんまり、毎晩なもんで、あとはこの友だちも難儀なってよ、

「とぉなぁ、ここにキジムナーがいたらたいへんだ」と言って、浜に行って、アダンの木をみんな焼き燃してしまったそうだ。それで、キジムナーは恩納岳の方に逃げて行ったって。

そしてよ、このアダンの木を焼き燃やしたのは許田の人だから、恩納岳から許田の船が見えると、そのたびに、船をひっくり返していたそうだ[17]。

時には、キジムナーと別れた者が襲われたり、命を取られる話もある。よく知られている話は真謝村を舞台にしたものである。キジムナーとの漁に疲れた男が、漁に出ている間に、妖怪の住処であるウスクの木を妻に焼かせたところ、キジムナーは「自分はもうここにはおれないから、那覇の安里八幡の庭のウスクに移るので訪ねてくれ」と言って去った。数年後、男が安里八幡に行き、近くの家でキジムナーの木を焼いた話をしたところ、家の主人は囲炉裏の燃えさしで男の目を刺したので、男は盲目になってしまった。主人は実はキジムナーだったのであり、このため男の子孫には眼病の者が絶えないという話である[18]。同様の話が他の場所においても語られており、キジムナー類の類族である伊平屋島のアカカナジャーについても類似した話が語られている[19]。

これとは別に、伊平屋島では、妖怪と別れようとした男がアカカナジャーに蛸をぶつけたところ、家で寝ていた自分の子供の目が抜かれたという悲惨な話も語られている[20]。蛸を投げる話は各地に伝えられており、キジムナーが嫌うという鶏の真似と蛸で妖怪を追い払った翁が、数日後には死んでしまったという話が佐喜眞の『南島説話』にも登場する[21]。

こうした復讐譚が相当長きにわたって沖縄で語られていたことは、18 世紀に編纂された『遺老説伝』巻三にも酷似した物語が収録されていることを見ても分かる。この話によれば、「往古の世」、真壁郡宇江城邑の久嘉喜鮫殿という人物が見知らぬ人と仲良くなり、共に漁をするようになるが、不審に思う点があってその後をつけてみると、相手が「一株の桑樹」に消えるのを見た。さては相手は「妖魔」であったかと驚いた鮫殿は妻にその木を焼かせるが、後に首里を訪ねた時にその体験談を他人に話し、姿を変えていた妖魔に「指の間」を小刀で刺されて死んでしまう[22]。これが真謝村の男の話の原型であることは明らかであるが、『遺老説伝』成立の時点ですでに「往古の世」と呼ばれている以上、キジムナーの復讐話が数百年の歴史を持つ伝承であることが分かる。

3　物語の背景：両義性と説明機能

このように「キジムナーと友達（魚取り、仕返し）」話は沖縄ではよく知られた物語であるが、なぜこのような悲しい話が広く語られて来たのだろうか。この点を理解するための鍵となるのが、こうした伝承の中では、キジムナーが「富を司る存在」と見なされているという点である。『南島説話』にある中泊の翁の話には、原著の中ですでに「キジムン富

を司る話」というタイトルが添えられているが、ここではキジムナーと親交を結んだ家が富み栄え、これを追い出した家は没落し、その富が他家に移動するという姿が明白に描かれている。佐藤公祥が指摘するように、こうしたキジムナーの姿に東北のザシキワラシとのパラレルを見ることができよう[23]。この話がリアルなものであったことは、中村史の調査が示すように、実際に先祖がキジムナーと漁に出たと伝えられている裕福な家が現在も存在することからもうかがえる[24]。

ここで不思議になるのは、キジムナーが富をもたらす存在であるなら、なぜ話中の人物は妖怪と手を切ろうとするのかという点である。毎晩漁に駆り出されることは辛いことであろうが、富の源泉と絶交してしまえば元も子も無い。にもかかわらず、なぜ妖怪を挑発するような行動をしてまで彼らは縁を切ろうとするのであろうか。

この点については赤嶺政信が２つの可能性を提示している。赤嶺は、これらの縁切りの背後にはキジムナーの「両義的な性格」があると見る[25]。これまでの物語を見ても、キジムナーは富をもたらす親切な存在であると同時に、災厄をもたらす力も持っていることが分かる。バージョンによっては、住処の木が焼かれた時にキジムナーの子供が焼け死んでしまい、その仕返しにキジムナーが男の妻子を焼き殺すという話もある[26]。「キジムナーはダマシヤー」という先に引用した言葉からもうかがえるように、人を惑わして山に連れ込んだり、家に入り込んで人々を金縛りにするといったキジムナーの特性も負の側面である。石を投げつけた漁師をキジムナーが殺したという話もあり、親から「夜、海へ行った時には、気をつけるんだよ。キジムナーは見ないふりをするんだよ」と言われたという明治生まれの話者もいる[27]。ここでは、キジムナーは安易に関わるべきではない危険な存在としてとらえられている。

こうした点を考えると、物語の男性が途中でキジムナーと縁を切ろうとするのも、こうした両義性がある妖怪と交際を続けることに恐怖を覚えたためと考えられる。赤嶺が指摘するように、『遺老説伝』の話の中で鮫殿が相手を「妖魔」と見て取ったのは、このような「魔」としての面を看破したためと見ることができよう[28]。

両義性という視点から見ると、キジムナー類のブナガヤーに関する以下の話は非常に興味深い。

> ある人がブナガヤーと友達になった。ブナガヤーは魚取りが上手で、魚の目玉を食べ、胴体は友達にやった。近所の人達から「ブナガヤーと友達になったら、あとは命がなくなるよ」と笑われる。友達は、キジムナー［栗原註：原文のまま］の撃退法を教わり、夜明け方、蓑笠を着て、鶏の鳴き真似をすると、ブナガヤーは去って行く。（宮平勇昌　明治40年11月26日生　松田）[29]

ここで注目すべきは、「ブナガヤーと友達になったら、命がなくなるよ」という珍しい

言葉である。下手に妖怪と親しくすると命にかかわるというのである。毎晩漁に駆り出されて辛いということは、ブナガヤーと付き合えば彼に振り回されることなり、次第に（精を吸い取られるように）衰弱することを意味するのではないだろうか[30]。そうであれば、危険があっても交際を絶とうとするのも理解できる。こうした「妖魔」的な側面が、キジムナーの復讐譚の背後にあることは十分考えられよう。

ただし、最近の論考では、赤嶺は両義性とは別の可能性に注目している。キジムナーとの縁切りは、ある家が俄かに栄えたり没落したことを説明するために、共同体によって「後付け」された話であるというのである。「ある家が成金になった、没落した、あるいはその家に眼病の者が絶えなかった等の現象が先にあって、それを不思議に思った周囲の人々が、それを説明する手だてとしてキジムナーの話を語りだしたと理解すべきである」と赤嶺は主張する[31]。

こうした説明機能がザシキワラシをめぐる伝承に読み取れることは、研究者の間でも認められている[32]。同様のことがキジムナーについても言えるであろう。事実、先祖がキジムナーと漁をしたという豊見城村の家を調査した中村は、キジムナーの漁に関する話は、「この家を取り巻く近隣の人々によって語りだされたと考えられそうである」との印象を述べ、そこに、この屋敷の「富に対する一種の羨望や嫉妬といった感情が介在していなかったとは言えない」としている[33]。キジムナーが人を漁に誘うという話は古来から知られていたのであろうが、その話が他家の盛衰を論ずるために用いられ、妖怪の復讐譚へと発展したと考えることができる。

上記の両義性と説明機能のうち、どちらの要素がこの話の中でより大きな位置を占めるかと論じることは、無意味であろう。実在の富裕者を念頭にして話が生まれたとしても、具体的なモデルが話者にとって意味をなさなくなった後も物語が各地で語り伝えられて来たのは、やはりキジムナーの二面性に関する記憶があるからと考えられるからである。赤嶺はこの二面性に、自然自体が持つ二つの側面の反映を読み取っている。

> かつて人々は、自然の中で樹木と親しみ、自らが山に分け入って樹木を伐り出し、それを家屋や船の資材として利用してきた。（中略）キジムナーの話は、そのように長きにわたる自然との緊張関係の中から生み出されたものであっただろう。人々は自然の恵みに感謝しつつ、一方ではその自然のもつ恐るべき側面に関しても常に自覚的であったはずで、そのことが、木の精やキジムナーに対する両義的観念を生み出し、支えてきたものと思われる[34]。」

普段は生活に必要な資を提供してくれる恵み深い存在であるものの、人間が思い上がったり、付き合い方を間違えれば大きな災厄をもたらすのが自然である。その自然の両義性が、山（樹木）と海という２つの自然界を行き来するキジムナーの姿に反映されていると

の洞察は、正鵠を射ていると言えよう。このように見ると、キジムナー復讐譚は、いわば自然世界と人間の交流の破綻を描いたリアルな物語であり、今なお聞き手の心にアピールすることも理解できるところである。

4　キジムナー話の現代的展開（1）：ネット上の噂話

現代の沖縄では、キジムナーについてどのような話が語られているのであろうか。かつての伝承の記憶は、今も若者たちの語りの中に残されているのだろうか。

これを垣間見ることができるメディアがある。1998年に開設され、投稿形式で読者が沖縄に関するクチコミ情報を書き込むことができる「沖縄のうわさ話」サイト（現在のアドレス：www.098u.com、管理者 tommy）である。20年以上にわたって継続している息の長いメディアであり、投稿の一部は単行本3冊（『沖縄のうわさ話』シリーズ、ボーダーインク刊、2006年、2008年、2011年）にまとめられている。この書籍と現在のサイトに掲載されている情報の中から、キジムナーとの遭遇を語っている話を4点見てみたい。無論、こうした体験談の真偽のほどは定かではないし、創作である可能性もあろう。しかしながら、こうした語りの内容から、投稿者がキジムナーについてどのようなイメージを抱いているか、どのような姿がキジムナーのものとして読者に認知されているかを読み取ることが可能である。

本に収録されている噂話の1つは、「名前なしさん」が書き込んだキジムナー遭遇談である。

> ある晩仰向けに寝ていると何かがやってくる気配がしました。じっとしてると、子供の声で『○○（私の名前）遊ぼう～』という声が聞こえてきました。そしてラジカセからいつも聞いているCDの音楽が流れてきました。『あれ、消し忘れたかな？』と思い起きようとしても体が重く動いてくれません。（中略）
>
> 暫くするとベッドの横にある机のほうからガサガサとビニール袋の音が聞こえてきました。その何者かはガサガサと音をたてながら私のほうに近づいてきました。そして棒のような硬くて細い腕？で私を起こすかのように背中を押してきました。

ここで投稿者は床から跳ね起きるが、辺りには誰もおらず、ラジカセもついていない。後になって自分の体験を父親に話すと、ちょうどその日、父親は職場の敷地内に映えていたガジュマルの大木から蔦を剥ぎ取って手入れをしていたことが判明し、これはキジムナーの仕業であろうと納得したという。「いたずらっ子の子供の気配」がしたのみで、怖い感じはなかったと投稿者は語る[35]。

ここで注目すべき点が2つある。1つは、キジムナーが寝ている人の体を押さえ込むという伝承が今なお健在であることである。しかしながら、この行動には負のイメージは負

わされておらず、投稿者も子供の遊びのように受け止めている。次に興味深いことは、この体験がキジムナーによるものと判断した根拠が、父親がその日にガジュマルの木の手入れをしたからという点である。ガジュマルの存在が体験の意味合いを決定する展開が、現代のキジムナー話ではしばしば見られる。

その１つの例が、「きっちょんさん」の体験談である。夜中に突然目を覚ましたところ、「30 センチ四方はあろうかという大きな顔に、これまた顔の３分の１はあろうかと思える大きな目をした、赤毛のおかっぱっぽい長さの髪をした子供の顔」があり、自分の体の上を「大きなアヒルのような生き物が駆け上がって行った様な」感触がした。翌日、近くの海浜公園を歩いてみてガジュマルの大木が数本あることに気が付いた投稿者は、「キジムナーの悪戯では」と考えたという。キジムナーが巨大な目を持つという伝承はあまり聞かないが、「赤毛のおかっぱ」は伝承にもある描写である[36]。これにガジュマルが加わったことで、怪異がキジムナーと結びつけられたのであった[37]。

2013 年８月に「京極堂さん」が投稿した実話怪談風の体験談には、きっちょんさんの体験談と共通する部分が見られる。7、8 年前（2006 年頃であろう）、投稿者は沖縄南部にある祖母の家を訪ね、親戚たちとしたたか飲んでしまう。車を運転することができなくなったため、彼は公民館の駐車場に止めてあった自分の車の中で１泊することにした。夜半、俄かに車が揺れるのを感じて目覚めた京極堂さんは、運転席の窓から「ざんばら髪で目が異様に大きく（本当に顔の半分くらいの目だった）、全身が赤黒い感じの青年とも少年ともつかない人物」が顔を突っ込んでいるのを見る。仰天した彼が大声を出すと、怪しい人物は駐車場の中央部にあるガジュマルの大木に向かって走り、そのまま消えてしまった。震えながら祖母宅に逃げ込むと、祖母は「キジムナーだはずねぇ。この辺の人はよく見てるし、おばーの家にもたまに来るよ」と言ったという[38]。前回の話と同様、巨大な目と「赤黒い感じ」、ガジュマルが怪異の正体を決める鍵となっている。

一連の投稿の中で最も興味深いのは、「リンゴさん」が 2008 年８月に投稿したものであり、現在もサイトに掲載されている。従妹と共に鳩間島にある母方の別荘を訪ねた投稿者は、夜中に目が覚めると、窓の外に「真っ白な顔で耳がでかく、髪の毛が赤っぽい者」が数名、家の中を覗いているのを見る。次の瞬間、彼らは室内に入って来てリンゴさんたちの体の上をも飛び回ったが、触れられても痛くはなかったという。後で母に聞いたところ、「あんたが見たのはキジムナーだよ」と断言され、庭にある大きなガジュマルから来たのだと言われる。のみならず、母はリンゴさんに「次から海に釣りに行って絶対プ？（オナラ）はするな、あんた達が釣りに行って大漁に釣れていたのは、キジムナーが加勢してくれたお蔭かもしれない、プ？するとキジムナーは逃げて行くから。（中略）帰るときは有り難うと釣った魚を１匹でも海にウサギテいるか？」と教えられたというのである[39]。

この話で目を惹くのは、島で釣りをして大漁になったことがキジムナーの助けと見なさ

れていることである。しかも、伝承と同じく海上での放屁がかたく戒められ、釣果を分かち合うことでキジムナーに感謝を示すよう勧められるなど、伝統的な「キジムナーと友達」話の世界がそのまま継続していることが分かる。実際、りんごさんの母方の祖母は神人であり、キジムナーについてもよく知っていたようである。母親の知識もこの祖母から来ているのであろう。

ただし、リンゴさん本人は半信半疑のようであり、母親の説明を聞くまではキジムナーのことを迷信と見なしていたことがうかがえる。このように、体験者の語りの内容はかなりの部分、キジムナーのことを持ち出す年長者が周辺にいるか否かに左右されることが多いのである。

5　キジムナー話の現代的展開（2）：実話怪談

最後に見ておきたい話は、近年メディアで「実話怪談」と呼ばれているジャンルのものである。実話怪談は、プロのライターが体験者から聞いた話をベースに書いた文芸作品ということが前提となっている怪異譚であるが、実際にはその定義は相当曖昧である[40]。民俗学的な聞き書きとは異なり、どこまでが実際に体験者が語った部分であるのか、どこまで文学的な編集や創作が加えられているのか、読者には定かではない。そのため伝承資料のように扱うことはできないが、噂話と同様、キジムナーについてどのようなイメージが持たれているか、何がメディアで「本当らしさ」と見なされているかをここから探ることができる。

沖縄の実話怪談と言えば小原猛の著作がよく知られているが、彼の『琉球怪談』シリーズにはキジムナーに関する話も数話見られる。中でも興味深い一篇が「秘密基地とキジムナー」である。「石川に住んでいた伊舎堂さん」は子供時代、ガジュマルの巨樹が生えている家に住んでおり、木の上に秘密基地を造って楽しんでいた。ある日伊舎堂さんは、悪戯をするカラスを焼こうとして、誤って木自体を燃やしてしまう。まもなく、庭から不思議な声がするのを聞いた伊舎堂さんが外に出てみると、赤茶色の長髪をした、肌が黄色く目が異様に大きい２人のキジムナーが立っていた。キジムナーは彼に、ガジュマルが焼けたために自分たちは出て行くが、次の旧正月にはこの家も焼けることになると警告する。実際、伊舎堂さんの家は翌年の旧正月に不審火のため全焼してしまうのである[41]。

木が焼けたのは過失によるものであるが、報復として家が焼かれるとの展開は、キジムナー復讐譚の伝統に沿ったものである。先の噂話では、ガジュマルに親切にした場合にキジムナーが現れているが、逆にガジュマルが傷つけられた時にもキジムナーは行動を起こすのである。

小原の著には「小便」と題された報復譚もある。Ｔさんの友達のＦ君は、「キジムナーなんていないさ」と言ってガジュマルの木に立小便をするが、Ｆ君はまもなく病気になってしまう。不審に思ったＴさんがＦ君の部屋の窓を覗こうとすると、窓ガラスの表面に

「ニワトリの足のような、三本足の奇妙な跡」がいくつもついているのを見る。F君は1週間後に回復して登校して来るが、Tさんにこのように話したという。木に小便をしてから寝込んでしまい、部屋の窓に「真っ赤なキジムナー」が何人も来ているのを見るようになった。ユタにお祓いをしてもらったが、「この子がしたことは悪質だったから、お灸をすえる意味でも、一週間は熱を引かさないようにした」とユタから言われたというのである[42]。

この話でも、ガジュマルに対する無神経な行動がキジムナーの報復を招いているが、注目すべきはユタの存在である。伝承の世界では、キジムナー関連の話にユタのような霊能者が登場することはあまり無い。しかし、現代の話ではキジムナーとトラブルが起きた場合、ユタに措置を頼むことになる。この話に続く「赤ら顔」という怪談でも、ある少年の顔が赤く腫れ上がってしまい、「キジムナーが悪さをしているから、ユタに見てもらおう」と祖母に言われてユタを訪ねる展開になっている[43]。

以上のネット情報や実話怪談から、次のような特徴を読み取ることができよう。第一に目を惹くのは、現代のキジムナー遭遇譚にも金縛り、釣りの手伝い、放屁の禁止、火による報復といった伝統的な要素が継承されていることである。両義的性格という点で言えば、負の側面が薄められて「いたずらっ子のガジュマルの精」という無害なイメージが強くなっているが、人の心の暗部をも語る実話怪談の世界では、今なお祟る側面が保たれている。

こうした伝統的な側面とは別に、従来の伝承の世界では顕著ではなかった新たな傾向も登場している。ガジュマルがキジムナーとの関係の核となっていること、「赤毛」に加えて「巨大な目」のイメージが定着しつつあることもその一つであるが、興味深いのはユタの役割である。伝統的なキジムナー話にはほとんど言及されないユタが、最近の物語の中でキジムナーと人間の間に立つ存在となって来た背景には、従来、キジムナーに対処する知恵を人々に授けていた共同体の影響力が弱くなって来たことがあるのではないか。名護ではかつて、子供の顔にできものができた時にはキジムナーの仕業とみなし、「おばあたち」が食事の膳と藁草履を門の入口に飾った後、子供の顔を草履で殴って治したという。こうした共同体の「おばあたち」の知恵が継承されなくなり、ユタがその欠けを補う存在となって来たと考えられるのである[44]。

6　結語

「渡久地清さんのお父さんは海が好きで、夜によく海へ出た。その時、キジムナーが舟にやってきて、いっしょに魚捕りをして遊んだという[45]。」牧歌的な言い伝えであるが、これまで見て来たように、実際の「キジムナーと友達（魚取り、仕返し）」話は牧歌的とは言い難い。物語の内容とその背景には、自然と人間の関係、自然の両義性、共同体における富の理解など、沖縄の人々が生きて来た厳しい現実の姿が透けて見えるのである。

こうした伝承は現代のキジムナー話の中にも取り込まれているが、近年の語りでは、妖怪が持つ負のイメージが弱められて、愛らしい面が強調される傾向があるように見受けられる。辺野古の埋め立てに見られるような将来を無視した環境破壊が進んでいることと、自然の報復力をも体現していたはずのキジムナーがおとなしい「ゆるキャラ」に変えられつつあることは、軌を一にしているように見えてならない[46]。その意味では、「帰るときは有り難うと釣った魚を１匹でも海にウサギテいるか？」というりんごさんの母親の質問は、自然の恵みを忘れた現代の人間に対する問いかけでもあろう。この警告を心に留めなければ、名護の民話にあった恩田の船乗りのように、社会という船を転覆させられる日が来ることになりかねない。実に、キジムナーとその類族たちが語りかけて来るメッセージは大きいのである。

1 例えば、ニシムラトモコによる絵本『まねっこキジムナー　マキちゃんのおうちさがし』（ボーダーインク、2017 年）。

2 渡嘉敷守「キジムナー」『沖縄大百科事典』上巻（沖縄タイムス社、1983 年）、833 頁。

3 遠藤庄治「キジムナーの二つの側面と二つの例話」『南島文化への誘い』（沖縄国際大学公開講座委員会編、沖縄国際大学公開講座委員会、1998 年）、271-272 頁；原田信之「南東の妖怪譚―キジムナー話をめぐって―」『奄美沖縄民間文芸研究』第 13 号（1990 年）、26-27 頁。

4 辻雄二「キジムナーの伝承―その展開と比較―」『日本民俗学』第 180 号（1989 年）、116-117 頁。

5 新里幸昭「沖縄の妖怪」『沖縄文化研究』第 21 巻（1995 年）、151-158 頁を参照。

6 原田信之「沖縄・伊平屋島のアカカナジャー―南島の妖怪譚をめぐって―」『説話・伝承学』第 3 号（1995 年）、52-54 頁。

7 辻、前掲、109 頁。ブナガヤーに出会ったことがある女性がこれを山の神と見なし、「（ブナガヤーは）人に害するものではない。人を助ける者なんだよ」と孫に教えたという話もある。新城真恵『沖縄の世間話―大城初子と大城茂子の語り』（青弓社、1993 年）、115-117 頁。

8 比嘉康雄『日本人の魂の原郷　沖縄久高島』（集英社、2000 年）、197-200 頁。

9 原田「沖縄・伊平屋島のアカカナジャー」、59 頁。

10 原田「南東の妖怪譚」、13-27 頁。

11 原田信之「世間話のなかの妖怪譚―伊是名島に事例を中心として」『民話の原風景―南島の伝承世界』（福田晃・岩瀬博編、世界思想社、1996 年）、164 頁；辻、前掲、115 頁。

12 伊藤龍平『何かが後をついてくる―妖怪と身体感覚』（青弓社、2018 年）、183 頁。

13 島袋源七『山原の土俗』（名著出版、1977 年）、154 頁。

14 この話型の名称は以下による。原田「南島の妖怪譚」、20 頁。

15 佐喜眞興英『南島説話』（名著出版、1977 年）、40 頁。

16 宜野座村教育委員会編（遠藤庄治監修）『宜野座村の民話―伝説編』（宜野座村教育委員会、1987 年）、96 頁。沖縄語での語りもこの頁に収められている。

17 名護市史編さん室編『名護の民話』（再版、名護市教育委員会、1997 年）、352 頁。

18 山下欣一・遠藤庄治・福田晃編『日本伝説体系』第 15 巻（みずうみ書房、1989 年）、381-382 頁。伊芸弘子編『沖縄首里の昔話―小橋川共寛翁のチティバナシ』（三弥井書店、1992 年）、

224-227 頁。

[19] 島尻のンナトゥ小の男の話とされている。宜野座教育委員会、前掲書、387-388 頁。原田信之「沖縄・伊平屋島の妖怪譚」『南島研究』第 30 号（1989 年）、37 頁。

[20] 原田「沖縄・伊平屋島アカカナジャー」、50-51 頁。

[21] 佐喜眞、前掲書、41-42 頁。

[22] 鮫殿の物語の原文は以下に収録されている。中村史「沖縄・豊見城村のキジムナー話」『小樽商科大学人文研究』第 95 輯（1998 年）、16-17 頁；赤嶺政信「キジムナーをめぐる若干の問題」『史料編集室紀要』第 19 号（沖縄県立図書館、1994 年）、25-26 頁。『遺老説伝』と説話の関係については以下を参照。田村敏和「『球陽外巻遺老説傳』所載の説話の考察」『沖縄民俗研究』創刊号（1978 年）、33-43 頁。

[23] 佐藤公祥「ザシキワラシとキジムナーの接点」『沖縄学』第 4 号（沖縄学研究所、2000 年）、69-82 頁。

[24] 中村、前掲、3-8 頁。

[25] 赤嶺「キジムナーをめぐる若干の問題」、17 頁。

[26] 同上、17 頁。

[27] 明治 45 年 12 月生まれの知花キヨの話。読谷村教育委員会・歴史民俗資料館編『渡慶次の民話』（読谷村教育委員会、1985 年）、38-39 頁。

[28] 赤嶺、「キジムナーをめぐる若干の問題」、26 頁。

[29] 宜野座村教育委員会、前掲書、388 頁。

[30] 「それと、『キジムナー友達切りたん。』と。それはキジムナーと友達になったらですな、切れることができないというんです。魚は取ってきてくれるしね。口は非常に楽にいけるが、それが夜はまた、夜明けどおし連れ歩くというんですな。」（話者：吉田新太郎、明治 35 年 11 月 10 日生）キジムナーのペースで行動しなければいけなくなることがうかがえる。読谷村教育委員会・歴史民俗資料館編『喜名の民話』（読谷村教育委員会、1980 年）、31 頁。

[31] 赤嶺政信『キジムナー考―木の精が家の神になる』（榕樹書林、2018 年）、23 頁

[32] 中村一基「座敷童子考」『岩大語文』第 4 号（岩手大学語文学会、1996 年）、2-4 頁。

[33] 中村、前掲、6 頁。

[34] 赤嶺『キジムナー考』、38 頁。

[35] 管理人 tommy 編『沖縄のうわさ話』（ボーダーインク、2006 年）、15-16 頁。

[36] キジムナーの髪は長髪としてイメージされることが多いが、済井出にはキジムナーが「赤い髪のおかっぱで山に住んでいる」との話がある。新里、前掲、154 頁。

[37] tommy、前掲書、17 頁。

[38] 「沖縄のうわさ話」https://www.098u.com/2013/08/117859（閲覧：2020 年 2 月 8 日）

[39] 沖縄のうわさ話」https://www.098u.com/2008/08/1415（閲覧：2020 年 2 月 7 日）

[40] 「実話怪談作家さんの間でも、実の所はっきりとした定義がない。あるようでいてよく聞くと細部が違う。」加藤一『「忌」怖い話』（竹書房、2016 年）、3 頁。

[41] 小原猛『琉球怪談　七つ橋を渡って―闇と癒しの百物語』（ボーダーインク、2012 年）、234-236 頁。

[42] 小原猛『琉球怪談　現代実話集―闇と癒しの百物語』（ボーダーインク、2011 年）、128-130 頁。

[43] 同上、131 頁。

[44] 名護教育委員会、前掲書、358 頁。

[45] 話者である渡久地清氏は大正 5 年 11 月 1 日に宜野座の生まれ。宜野座村教育委員会、前掲書、

389 頁。

[46] 「キジムナーの絶滅化と、一方でのキジムナーのマスコット化という今日的現象は、われわれの社会が長い歴史を通じて維持してきた人間と自然との緊張関係が失われてしまったこと、あるいは失われつつあることと相関の関係にあると考えていいだろう。」赤嶺政信「キジムナーの民俗学」『やわらかい南の学と思想―琉球大学の知への誘い』（琉球大学編、沖縄タイムス社、2008 年）、79 頁。